

本願寺「自死問題実態調査」の 分析結果 (3)

教学伝道研究センター
現代宗教課題研究部会

■はじめに

本願寺派の全寺院を対象とした自死問題に関するアンケート調査「自死問題実態調査」につきまして三回目の分析報告をさせていただきます。

今回は、自死に関する意識調査の自由記述について報告いたします。記述式回答の分析方法につきましては、テキストマイニングという手法（詳細は文末※参照）を用いました。この手法は、大量の文章から要約された知識を獲得することを目的としたものであり、分析者の先入観による誤差をなくすことができるという利点があります。

■意識調査における自由記述の分類

自死に関する選択式の意識調査についての分析結果は、初回の六月号において報告いたしました。ここでは、選択式の意識調査の後の、

「自死に関する上記の意見について思うところがございましたらお書きください」

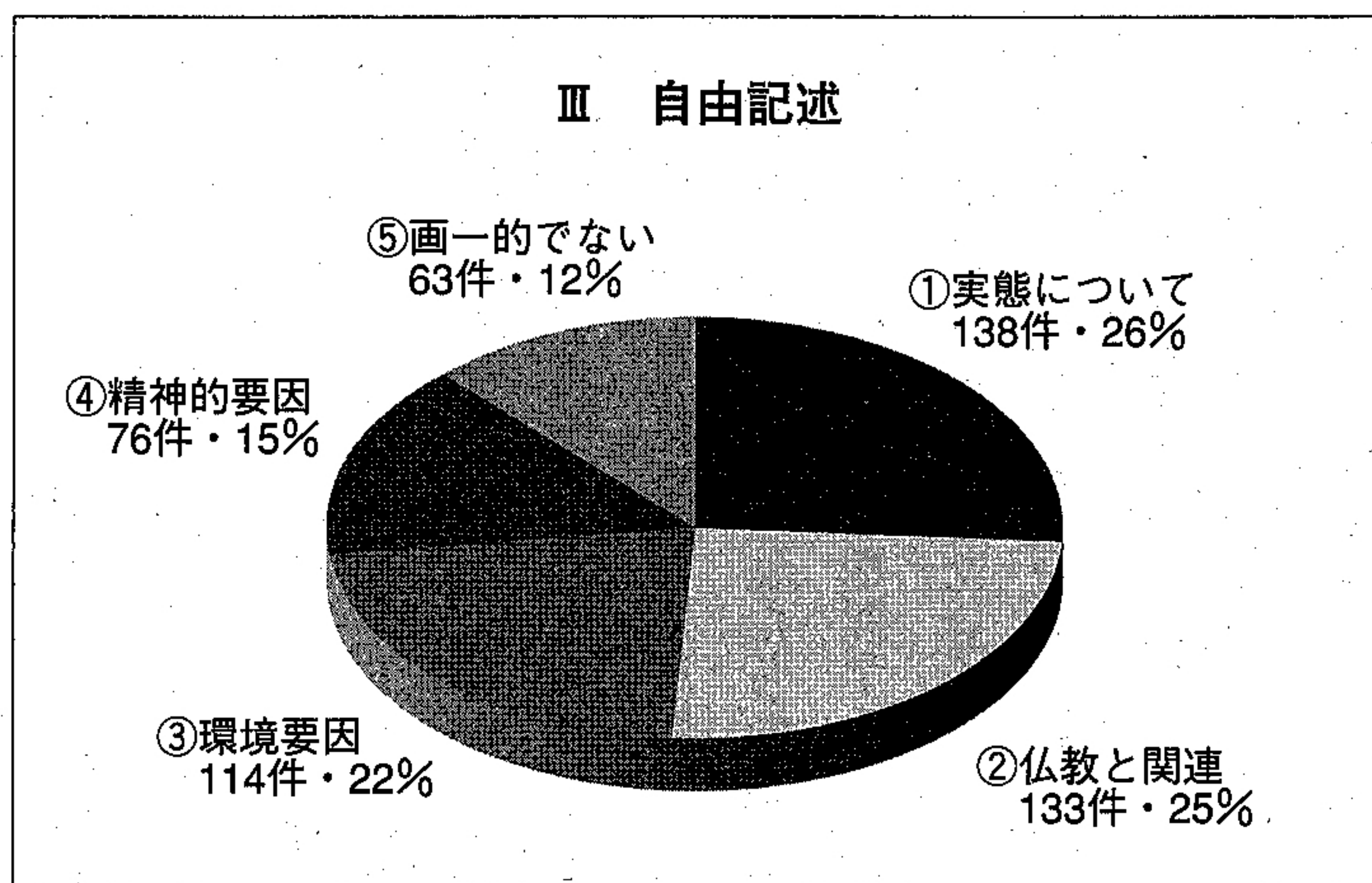
と問う自由記述についての分析結果を報告いたします。

自由記述には、全五二四件の多様な回答をお寄せいただきました。そこで、先述のテキストマイニングの手法を用い、回答内容の傾向を分類すると、

- ①自死の実態について
- ②仏教と関連付けた記述
- ③自死に至る環境要因について
- ④自死に至る精神的要因について
- ⑤自死は画一的でない

の五つのグループ（図1参照）に分かれました。

なお、これらのうち、③と④は、自死の要因に関するものとして一つにまとめることもできます。



〈図1 自由記述分析結果〉

■自死の要因グループ③・④の

特徴と傾向

自由記述について見ていきますと、大きく二つの特徴を見ることが出来ます。一つは、私たちが自死について考える際に、その原因を探ろうとする傾向がある

という点です。

もう一つは、それぞれの要因の関連性と連鎖の仕方の傾向を示す「自殺の危機経路」という重要な問題にまで、私たちの視点がなかなか向かないという点です。

■「原因が知りたい」

意識調査において自死の原因に関連する質問は、全八問中、

「自死は、社会的な要因が強くはたらいっていると思う」

「自死は、弱い人がするものであると思う」

という二問のみでした。それにもかかわらず、自由記述全件（五二四件）の中、三分の一を超える一九〇件が自死の原因に関するグループ③・④に分類されました。ここに、自死の原因に対する僧

侶（寺院関係者）の関心の高さが見てとれます。

これは、自死の問題に関わっていくには、その自死の原因について把握しておかねばならないという意識の表われだと推察されます。また、私たちが自死を見ていく際には、その原因を知ろう（知りたい）とする傾向があり、言い換えるならば、この自由記述の回答には、原因をわかりたいという思いが反映されていると考えられます。

次に、原因を知ろうとすることと、遺族の感情面でのサポートとは、どのように関係しているのかということについて触れてみたいと思います。

■感情に寄り添う

私たち僧侶（寺院関係者）が、自死遺族に接する機会が多いことはご承知のとおりです。そこで、これまで教学伝道研究センターでは、自死に関する公開研修会「別離の悲しみを考える会」を三回に

わたり開催し、自死遺族に対するさまざまな関わり方を学んできました。その中で学んだことの一つに、「感情に寄り添う」ということがあります。

遺族と接する際に、私たちは、自死に至った原因を含めて、自死された方と遺された方々の状況をしっかりと把握しなければ、きちんと対応できないと考えがちです。そこで、どうしても自死に至った原因や状況をたずねたくなってしまう。しかし、目の前で悲しみ苦しんでおられる方にとって、原因や状況は、聞かれないことであつたりします。また、混乱状態にあるため、状況を説明することが負担となることもあります。

こうした、自死に至った原因や相手の状況を知りたいという私たちの思いの背後には、相手の状況を把握することにより、自分自身が納得したいという気持ちがあります。つまり、相手に寄り添うためではなく、自死という現実を受け入れる理由を相手に求め、自分が納得し安心したいために、原因や状況を知ろうとし

てしまうのです。

確かに、自死の原因を把握しておくことは必ずしも無意味なことではありません。むしろ、自死を防止するための具体的な対応をするときには、とても重要な情報となります（原因を把握しておくことの意義については、後ほど「自殺の危機経路」について述べる部分で少し触れることにします）。

しかし、目の前の悲しみ苦しんでいる方に寄り添うということに限って言うならば、必須の情報とは言えません。場合によっては原因や状況を聞くことによつて、自死念慮者や遺族の方の心が離れてしまうことさえあります。その方の感情そのものに焦点を当てて、その思いを聞いて受け止めていくことこそが求められているのです。

もちろん、その方が原因や状況についての話をされる際には、その話を聞くことが大切です。しかし、そうした場合でも、聞いていくことの中心は、あくまでも話の裏側に潜^{ひそ}んでいる感情であり、思

いなのです。

■僧侶が指摘する自死に至る要因

要因に関するグループは、社会的要因や人間関係などに関する「環境要因グループ」③と、うつ病や心の支えなどに関する「精神的要因グループ」④とに分かれます。

自死の要因に関して、自殺防止対策支援センター・ライフリンクの調査では「自殺の十大危機要因」（図2参照）が指摘されています。

自殺の十大危機要因

- ①うつ病
- ②家族の不和
- ③負債
- ④身体疾患
- ⑤生活苦
- ⑥職場の人間関係
- ⑦職場環境の変化
- ⑧失業
- ⑨事業不振
- ⑩過労

〈図2 自殺の十大危機要因〉

自由記述においては、これら十大危機要因のなか、上位二つにあたる、「うつ

病」「家族の不和」に関する記述が多く見られました。

うつ病に関する記述が多かったことは、近年の自死に関する情報が行きわたっていることに起因するものと考えられます。

一方で、人間関係についての記述が多かったことは、回答者が僧侶（寺院関係者）であることと関係していると考えられます。一般に、自死問題について周囲のサポートの必要性が指摘されます。しかし、自由記述ではこれに留まらず、人間関係の難しさを指摘し、それが逆に自死の要因となることまで言及されていました。この点は、こうした領域に深く関わっている僧侶（寺院関係者）ならではの視点と言えるのではないのでしょうか。

しかしながら、十大危機要因のその他の要因についての記述はごくわずかであり、自死の要因に関する広範な情報を持っていないことを指摘することができません。特に、具体的な経済的要因についての言及はほとんどなく、この点への関心

と情報が不足していると考えられます。

■自死問題の盲点

次に、先に示した、私たちの考え方の視点が、自死に至るそれぞれの要因の関連性と連鎖の仕方の傾向を示す「自殺の危機経路」という重要な問題にまで、なかなか至らないという点について見てみます。

「自死は画一的でない」とするグループ⑤では、状況が個々の事例によって異なり、要因も複雑に複合しているのだから、ひとつくりに議論すべきでないという指摘がなされています。

この指摘は、自殺防止対策支援センター・ライフリンクの調査と合致しています。そこでは、自死の背景にさまざまな危機要因（計六八項目）が潜んでいると指摘されています。また、一人当たり平均して四つの要因が複合して自死に至るという調査結果が示されています。

一方で、自死に至る要因間の関連性と

連鎖の仕方の傾向に、いくつかの特徴が見られるとの調査結果があるのですが、この点について指摘している回答はほとんどありませんでした。

■「自殺の危機経路」

私たちには、自死の要因に注目し、知ろうとする傾向があります。また、それらが複雑に複合しているということにも視点を向けることができています。しかし、自死の実態を知り、自死問題に対応していくためには、これらの情報だけでなく十分とは言えません。その背景にある、自死に至る経路やその特徴について知っておくことが、実際の対応を適切に行う重要な手掛りとなります。

自死には、先に示したようにさまざまな危機要因があります。それらの要因は、職場環境などに応じた、それぞれに具体的な特徴を持つようです。例えば、学校における「いじめ」について見てみます。自殺防止対策支援センター・ライフリン

クの報告によりますと、ほとんどの場合、

「いじめ」といった単一の要因だけで自死に至るわけではないようです。「いじめ」が要因となり「学業不振」が生じ、さらに「学内の教師との人間関係」の悪化が重なり、これらから「進路の悩み」が生じて自死に至るという経路が指摘されています。このように、危機要因が互いに連鎖しあいながら「自殺の危機経路」を形作っていることが明らかになってきています。

また、複数の危機要因が重なったときに引き起こされやすいもの（例えば、うつ病の場合、平均して三つの危機要因が複合した時に引き起こされるという調査結果がでています）もあるのです。

こうした、自死に追い込まれていく具体的な状況への想像力を喚起する「自殺の危機経路」についての十分な知識を持つておくことは、日ごろの対応の感度を上げておくために、とても重要なことだと思われます。

（研究員 竹本了悟）

※分析の方法について

今回は、テキストマイニングの「自動分類」という技術を用い、なるべく客観的な分析を行うことを意図しました。

アンケートには、ある程度、答えを予測して作成している面もありますので、分析も主観的になりがちです。この欠点を補い、より客観的な分析を行うことに適しているのが今回用いたこの技術です。

「自動分類」という手法の概要を述べます。この手法はアンケートを「図1」のように計算により自動的にグループ分けすることを言います。計算とは、一件ずつのアンケート同士の距離を測ることを示します。また、ここでの距離は、内容の似ているものは短く、異なるものを長くなるように定めています。計算の結果として、距離が近いものを同じグループに、遠いものを別のグループに分けていくことになります。

このように計算することによって、より客観的であり、繰り返しても同じ結果

が得られる分析ができます。

（早稲田大学理工総研研究員／研究生 雲居玄道）

1 設問は次の八問で、それぞれ「思う・やや思う・どちらともいえない・あまり思わない・思わない」の五択によって回答していただきました。

○「自殺したい」と口にする人は、本当は自ら命を断つことはないと思う。

○自死は、何の前触れもなく突然起こると思う。

○自死は、個人の自由意志にもとづく選択として認められると思う。

○自死は、社会的な要因が強ければたいていと思う。

○自死は、命を粗末にしていると思う。
○自死は、弱い人がするものであると思う。

○自死は、仏教の教えに反していると思う。

○自死は、場合によっては仕方がないことだと思う。

2 アンケートの回答数は全部で二六九四件でした。

3 これまで開催した「別離の悲しみを考える会」は、第一回「自死遺族の悲嘆とグリーフケア——悲しみはやさしさ——」講師・若林一美氏、第二回「どのようにすれば自死遺族と適切にコミュニケーションできるか——支援的悲嘆ケアについて——」講師・梁勝則氏、第三回「自死の遺族のサポート方法」講師・鷹見有紀子氏。第一回と第二回については『自死、遺された人たち——自死の悲嘆によりそって——』というブックレットとして公刊。今後も継続的に開催する予定です。

4 自殺実態解析プロジェクトチーム編集『自殺実態白書二〇〇八』一七頁。

5 前掲書、一六頁参照。

6 前掲書、一五～六九頁参照。
その他、

○うつ病から自死の経路の危機連鎖度

が最も高いこと。

○うつ病の危機複合度が最も高いこと。

○危機の進行度に三つの段階があること。

○危機要因それぞれに個別の危険性が潜んでいること。

などの指摘がなされています。